

米ベンチャー
日本法人

バイオイメージング研究施設を大阪に開設

バイオベンチャーのアンチキャンサージャパンは4日までに、大阪府茨木市の彩都バイオインキュベータ内に研究施設「Molecular Imaging Lab」を開設した。独自のバイオイメージング技術を活用し、がん関連の研究・開発に取り組む。

同社は、米バイオベンチャー・アンチキャンサーの日本法人で、2006年11月に設立。米本社は、抗がん剤や診断薬の研究・開発・販売などを手掛けており、原発巣とは異なる臓器にがんが転移するモデルマウスを開発した。

バイオイメージングとは、生体内分子の可視化、観察のことで、研究施設では蛍光色を発するタンパク遺伝子を使用する。蛍光タンパク遺伝子をヒトがん細胞に導入した後、モデルマウスに組み込むことによって、がん細胞の増殖や転移の様子が定量的・経時的に外部から測定できる。マウスを非侵襲的に体外から観察することが可能で、将来的にはがん患者の診断や、抗がん剤の治療効果の評価に応用できる可能性もあるという。

同社は今後、蛍光タンパクを使った小動物による生体内イメージングの研究・開発▽ヒトがん転移モデルマウス・血管新生モデルマウスを利用した抗がん剤評価の受託研究▽小動物を使ったがんの画像化技術の研究・開発——などに取り組んでいく。

ノボ バイオ試験工場が完成

ノボノルディスクはこのほど、ほ乳類細胞由来タンパク質によるバイオファーマシューティカル領域の開発と生産のため、デンマーク・ヒレロズで建設中だったパイロットプラント（試験工場）が6月12日に完成したと日本法人を通じて発表した。新工場で作られる最初の化合物はがんの抗体となる予定。

試験工場は既存工場を拡張したもので、開発の研究室と生産施設からなる。床面積は計3500㎡で、投資額は約3億5000万デンマーククローネ（約63億6300万円）。

米アボット シナジスが小児反復性喘鳴を半減

米アボットはこのほど日本法人を通じ、モノクローナル抗体「シナジス」（一般名パリビズマブ）が、早産児の反復性喘鳴の発現率をほぼ半減させたとの研究結果を発表した。

スペイン、オランダなどの27施設が参加したプロスペクティブな多施設共同研究によるもの。研究では、RSウイルス感染症の予防を目的にシナジスを生後1年間に3回以上投与した早産児（在胎期間35週以下）群と、シナジス未投与群とを比較。2年間の追跡調査の結果、反復性喘鳴の発現率はシナジス群13%、未投与群26%となった。

日本では、2002年にRSウイルス感染による重篤な下気道疾患の発症抑制薬として、早産児と気管支肺異形成症児に対する適応承認を取得、05年には先天性心疾患児に対する適応が追加された。日本国内での同剤の06年度売上高は154億円（薬価ベース）。